

テイヤール・ド・シャルダン奨学金

北原隆メモリアル賞

2009年度 懸賞論文

人間の進歩・進化と私の研究

—ダーウィンの『種の起源』150年とテイヤール・ド・シャルダンを記念して—

B0991906 坂田 奈々絵 (神学研究科・神学専攻)

要約

人間の進化の道程を探求するならば、そこには必然的に「進化とは何か？」という問いが存在する。これに対し、精神圏の進化という新しい進化の見方を提供したテイヤール・ド・シャルダンは、神学における人間の本来のありようの探求に一筋の光を与える。

筆者の研究テーマは擬ディオニュシオスの思想を手掛かりとして、12世紀を生きたサン＝ドニのシュジェが語った、新しい美のありようである「アナゴーゲーの流儀」を探求することである。この美のあり方は一言でいえば、美しい物質を経て非物質的な真理へと上昇するものである。そしてこの思想の背景には、擬ディオニュシウスの「否定神学」がある。その否定神学において、すべての神に関する「名」は「否定」される。神の「名」として我々が考えるすべての言葉は、自分自身の観念において考えたにすぎない。そのため、ある特定の観念を神の名と限定して考えることは自己閉塞に陥ることと同義とも考えられる。否定はそれを突破するのである。そしてこうした「アナゴーゲーの流儀」を踏まえて、シュジェは聖堂の改築作業を行い、それは結果として「ゴシック建築」という建築様式・技術の「進化」を生み出したのだ。

シャルダンによれば、人間が目指すところは精神の進化である。そこから見るに、利潤追求を第一とし、人間自らが自己崩壊を起こすかのような現代世界のあり方は、進化に向かっていると断言することはできない。そこれに対してこの「否定」の思想の知恵は、光明を与えるものであると言える。なぜなら固着化した神の「名」を否定することで、その自己閉鎖を突破し、利潤追求を超えたより広い視野を獲得することが可能になるからだ。加えて、シュジェの行った改築作業は、知識や技術と宗教的知恵の協働の一つの歴史の見本とも言えるのである。そしてこのような協働による歩みこそが、真の進歩と言えるのではないだろうか。

はじめに

人間の「進化」「進歩」という言葉を自らに問いかけたとき、まず第一に浮かぶのは「そもそも進化とは何か？」という根源的な疑問である。筆者の研究は、乱暴にまとめるならば古代のキリスト教思想と中世美術の交点を探ることであり、一見すればこのような研究は遠い外国の昔を振り返るといふ、いまここで歩まれんとする人間の進化とは到底関係ないようなもののようにもとれる。しかし今を生きる人間が先知をたどるといふことは、今に共通の知恵を探し当てる可能性を秘めている。これこそが、筆者の研究の第一の動因である。そこで本稿では、まずダーウィンのもたらした新しい生命進化の道行と、それに対して人間の精神的色彩を加えようとしたシャルダンの人間の進化のありようを概観し、真の進歩・進化を考える上での枠組みを得たい。そしてそれを踏まえうえて、筆者の研究するサン＝ドニのシュジェが残した神学的芸術の美とその背景思想についてを説明し、その視座から本研究が人類の進歩に対しどのような提言をなしうるかを問いたい。

1. ダーウィンとシャルダン

1859年にダーウィンが発表した『種の起源』において書かれた世界の進化的変化、そして自然選択の学説は、既存のキリスト教的社会に大きな衝撃を与えた。なぜならそれは、「光あれ」から始まりアダムとイブという二人の人間が「唐突に」創造されたという、神による世界創造の否定であり、またギリシア哲学から思弁が組み上げられた既存の古典的人間観そのものを根底から覆すものであったからだ。ここでこの進化論、自然選択説の提唱は、人類が常に対面しているリアリティの新しい局面の大いなる発見ということであり、それは当然として積極的な意義を持つものとしてとらえたい。そうでなければ、シャルダンの言う世界像は、否定的に取り扱われる世界観の上に重ねた空想のように扱われてしまうからだ。シャルダンはあくまで進化論のもたらす「現実の姿」と調和する形で精神的な世界観を構成したのである。

さて、テイヤール・ド・シャルダンは周知の通り、当時のカトリックが保持していた「創造論」を、より一歩進めた形で展開した。ダーウィンの提唱する進化論の世界では、人間も犬も猫も、すべての動物は進化の途上におかれ、人間が独自に行くと人間自身が信じている認識もまた、動物の群れの中に解消されてしまう。しかしシャルダンは生の本質に「見ること」、つまり認識することを据え(精神を物質の核とした)、進化の連続を精神のそれにも見出した。そして進化を通常可視的な生物圏の形成として考えることに加えて、それらを覆う精神圏の形成と完成を進化の最終目的として据えたのである。この精神圏を完成させるものが人間であり、精神圏の究極にあるオメガ点はその進化の目標となり、そこへと人間を「愛」によって導いていくのである。こうした中で人間は、認識しているという主観においても、またこの宇宙の要であるという客観においても、世界の中心となるのである。

こうした点から「人間の進化」という言葉を見るとき、それは単に生物学的な途上を推定するものではなく、必然的に人間そのものの知の歩み、生へと向けた道行を考えざるを得ないだろう。またそこには、オメガ点への収束というキリスト教的な「終末」の思想も描き出される。それによってここで進化は、ある目的をもって繰り広げられるものとなり、そのため歴史は発達していくものとして見るこ

とができるのである。また進化論的なリアリティのみの世界からは、10年前の人類という種と10年後の人類という種の間には相違を見つけることは困難である。しかしシャルダンの言う精神圏の生成に人間がいかに寄与するかを考えたとき、ただ20年間の歴史をみる価値はあるのである。

2. サン＝ドニのシュジェ

では筆者の研究内容を概観したい。ここでは12世紀に生きたサン＝ドニのシュジェが行った聖堂改築と、その構想として書かれた新しい建築美の考え方、そしてそれに影響をもたらしたものとしての擬ディオニュシウス文書について言及する。そこで「作品」という物質における感覚的な美が、単なる「快」を超えてある真理を語るということ、そしてその語りがいかに行われるか、ということを描き出したい。

シュジェ (Suger c. 1081 – 1151)はイル・ド・フランスの大修道院であるサン＝ドニ修道院の院長を務めた人物である。彼は様々な政治的働きと同時に、サン＝ドニ修道院聖堂改築を指揮し、新聖堂を造る上での自らの思想を書物に書き残した。この彼の改築作業と著述が、結果として現代「ゴシック建築」と呼ばれる建築様式を作り出したのだ。彼はその構想の中で、二つの新しさを持っていた。第一は物質的可視的「光＝美」を徹底的に求めた建設の方針であり、第二にはこの「光」を精神領域に届くものとした点である。

それでは彼の書物“De Administratione (統治記)”の詩を二つ引用し、彼の求めた「光」について具体的に見てゆきたい¹。

引用①

さらに諸々の扉の(portarum)銘文は以下のとおりである。

あなたが誰であれ、扉のほまれを高めようと尋ね求める者は、
金や費用ではなく、作品に費やされた辛苦におどろけ。

作品は卓越して輝き(claret)、さらに卓越して輝く(claret)作品は、
もろもろの精神を照らす(clarificat)ように。

それは精神があまたの真の光を通して、真の門(vera janua)であるキリストのおられる
真の光へ(ad verum lumen)と至るようにするためである。

これらの内部がどのようにあるかを、黄金の扉は定める。

鈍い精神は物体を経て真理へと上昇する。

そしてかつて黄泉へと沈んだものは、この光をうけて黄泉還る。²

¹以下の引用はいずれも E. Panofsky による“*Abbot Suger on the Abbey Church of St. Denis and Its Art Treasures*”(Princeton Univ Pr; 1979)を原典として、それに私訳を施したものである。また章節番号も同書に拠った。

²「統治記」27 De portis fusilibus et deauratis.

引用②

より後の新しい部分が、先にあるものへと接合された時、
 照らされた (clarificata) 宮殿は、その中心部において激しく輝く (micat)。
 実に光 (clare) と結び付けられた光 (claris) は輝く (claret)。
 そして新しい光 (lux nova) が染め上げる、卓越した作品は輝く (claret)。
 我々の時代において、その増築は行われた。
 私、スゲリウスが、その間の指導者であった。³

この二つの詩は、1140 年に聖堂西正面が(引用①)、1144 年に古い聖堂部分と新しい部分の接合作業が(引用②)、それぞれ完成した際に聖堂入り口に刻まれたものである。

まず①の詩句から見てゆきたい。①において書かれているのは、「作品は輝く」ということ、そしてその輝きは「精神を照らす」ということ、照らされた精神は「真理へと上昇する」ということ、またその真理も「光」として表現されている、ということである。この詩が刻まれた扉口は当時、塗金されて輝いていた。このことから、この詩で書かれている通り、「輝く」という表現は単に視覚的なものとしてもうけとれるのである。この「視覚的」に焦点を当てて②の詩を見たい。②の冒頭で書かれているのは、古い聖堂と改築の終わった新聖堂の接合作業の完成である。ここでその完成は「激しく輝く」と描写されている。建築史の流れを見るならば、シュジェにとっての「旧聖堂」、つまりロマネスク様式のそれは分厚い壁面とわずかな窓しか持たず、視覚的に「暗い」ものであった。しかし改築された聖堂は細い柱と薄い壁、そして比較的大きな窓を持ち、それまでに比べれば圧倒的に「明るい」ものであった。つまり①の詩では「光」が抽象的な「作品」と言われていた一方で、②の詩ではそれ以上に具体的で視覚的な明るさが言われているのである。そしてこの詩における「輝き」にまつわる言葉の強調からも、この詩の主題が「光」であることが読み取れる。ここで「光」はひとつには採光による自然光として、ふたつには金の塗られた作品の輝きとしてあげられる。そのうえで①において、光は精神を高めるものとしても書かれるのだ。

ここで同じ著作より、シュジェが聖堂における具体的な「作品」を描写した場面を引用することで、作品と光、そして精神がどのようにつながっているかをより明確にしたい。

Portarum quisquis attollere quaeris honorem, / Aurum nec semptus, operas mirare laborem, /
 Nobile claret opus, sed opus quod nobile claret / Clarificet mentes, ut eant per lumina vera / Ad
 verum lumen, ubi Christus janua vera. / Quale sit intus in his determinat aurea porta: / Mens habes
 ad verum per materialia surgit, / Et demersa prius hac visa luce resurgit.

³ 「統治記」28 De augmento superioris pertis

Pars nova posterior dum jungitur anteriori, / Aula micat medio clarificata suo. / Claret enim claris
 quod clare concopulatur, / Et quod perfundit lux nova, claret opus / Nobile, quod constat auctum
 sub tempore nostro, / Qui Suggestus eram, me duce dum fieret.

引用③

それゆえ、神の家の飾りに対する愛情を通して、時に宝石の持つ多様な美しさが、私を外の心配事から呼び戻した時、さらに聖なる諸徳の多様性に対してほむべき瞑想が、私を物質から非物質へと移行させることにより、(多様性を)追求するよう説き薦めるとき、私は自分が地上の外の、他の地にあるように観た。(その地にある私は)全く地の汚濁の中にも、天上の清浄さの中にあるのでもなく、留まっているようであり、さらに下から上へと、神がおあたえになったアナゴージェの流儀によって(anagogico more)運ばれることができるのだ。⁴

ここで彼は宝石の美しさもたらす精神への働きについて語っている。特徴的にあげられるのが「アナゴージェの流儀」という言葉である。これは「ana(上へ)」「ago(導く)」という二つのギリシア語をつなげた言葉である。この言葉自体はシュジェの創作ではなく東方キリスト教の神学者の間で使われていたものである。「下から上へと」「物質から非物質へと」という言葉からもわかるように、この「アナゴージェの流儀」と先ほど引用した「真理へと上昇する」上向きの流れは同じものであると言える。それを踏まえて、こうした上昇をもたらす「作品」は、ここでは「宝石の美しさ」と置き換えられている。つまり先ほどの二つの詩に書かれていた、聖堂に差し込む光や金の輝きだけでなく、光は作品の美としても書かれているのである。このように、シュジェにとって、美しい物質の世界とは、精神にまでとどく光の世界であり、光を受けた精神は「真理」という非物質の、しかし「光」といわれる世界へと上昇するものなのである。そしてこのような物質に対する考え方を表現したものが、「アナゴージェの流儀」という言葉なのである。そして「光」を実現せんとしてできた建物こそが、ゴシック建築という新しい建築の様式だったのである。

3. シュジェと擬ディオニュシウス

それではシュジェの背景をさらに探りたい。彼の「光」と「美」の無反省なつながりの根源をたどってゆくと、そこには5世紀にシリアに生きたと見られる擬ディオニュシウスの思想の血脈が見いだせる。擬ディオニュシウスの残した文書は、シュジェの時代では、使徒言行録に登場するアレオパゴスの議員ディオニュシウス⁵という、パウロに直接教えを受けた人物が残したものであるとされており、さらにその聖ディオニュシウスはパリで殉教し、サン＝ドニ修道院の礎となったと考えられていたの

⁴ 「統治記」33

Unde, cun ex dilectione decoris domus Dei aliquando multicolor, gemmarum speciositas ab exintrinsicis me curis devocaret, sanctarum etiam diversitatem virtutem, de materialibus ad immaterialia transferendo, honesta meditatio insistere persuaderet. videor videre me quasi sub aliqua extranea orbis terrarum plaga, quae nec tota sit in terram facere nec tota in coeli puritate, demorari, ab hac etiam inferiori ad illam superiorem anagogico more Deo donante posse transferri.

⁵ 「しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリズという婦人やその他の人々もいた。」(使徒言行録 17:34)

である⁶。つまりこの擬ディオニシウスなる人物の残した書物は、当時は非常な権威あるものとして考えられていたのである。

擬ディオニシウスによれば、創造は神による「存在の付与」として考えられ、そしてそのために、すべてのものが神の「名」となりうると考えられた。この神の「名」を被造物のうちに探っていく肯定神学と、被造物の中にこうした神の「名」性を認めながらも、神の絶対超越性の故に「名」を否定し、神の世界へとさらに上昇していく否定神学を枠組みに持ち、三つ組を構成しながら互いに協働し神のもとへと上昇せんとする、天使たちと我々におけるヒエラルキーが世界の基本構造をなす。

擬ディオニシウスはこの世界を観念的なアイデアの世界が先立つ新プラトン主義を基本としたために、これらの神の名は、抽象的で観念的なものになるほど、より「神に近い」ものと考えた。そのため彼の著作『神名論』において、もっとも神の本質を表している「名」は「善」と言われるのである。そしてこの「善」の働きそのものを表すのは「光」である。擬ディオニシウスもまた、シュジェと同じく視覚的な光を神的な「光」の写しとしても考えている。「光」は目に入ると同時に即働くものであり、主体とその働きを切り離すのが困難なものである。この現実における光の働きが、ディオニシウスが神の働きを説明するに際して先立っていたとも考えられよう。そしてこうした「善」を光のごとく我々が感知した際に、それに対して魅力を感じる要因として「美」が挙げられる。つまり「善」は「光り」、「美」をもって我々を惹き付けるのである。こうした思想こそが、シュジェが無反省に光と美を同一のものとして扱った根拠になるのだ。

そして物質が精神へと上昇せしめるものであるとした根拠は「否定神学」にある。先述したように、すべてのものは神の「名」となりうる。しかし否定神学において、「神はAをはるかに超えている」という言葉によってAという名は否定される。これと同様のことが、シュジェの「作品」たちにも言えるのである。つまり『宝石の美しさ』は神の名だが、神はこの『宝石の美しさ』をはるかに超えて美しいのである。この否定を繰り返すことによって神名は抽象度を増してゆくことになる。これこそが、物質から非物質への「移行」と言えるのだ。そこで物質が「否定」される前提としてあるならば、初めから作品＝ものがなくてもよかったのではないかと、とも考えられる。この作品そのものに意味を与えるのは、「否定するためにある」という消極的なありようではなく、『創世記』において神が世界を創造する折に度々書かれる「よしとされた」という言葉である。さらに言うならば、「神が人(物質)となった」という、神からの最大限の物質性の肯定なのである⁷。つまりこうした「否定」は、まずそのものの「肯定」が

⁶ サン＝ドニとは、聖ディオニシウスのフランス語読みである。

⁷ シュジェはまた、「統治記」33にて「救い主は全てにおいて普遍的に、なんら例外なく、我々のために働かれるのを拒まれなかった。彼はご自身の本性を我々へと、一つに、また驚くべき不可分さのもとに和合なさった。(in omnibus enim universaliter decentissime nos oportet deservire Redemptori nostro, qui in omnibus universaliter absque exceptione aliqua nobis providere non recusavit; qui nostrae suae nostram sub uno et ammirabili individuo univit,...)」と語っている。これは、当時の物質的な飾りを排し真に清貧に生きようとする修道院改革を推し進める人々の論争を踏まえ、それに反論する文脈において書かれている。ここから、「我々の本性」という、罪に陥った「まったく卑しいもの」において彼＝神が和合した(受肉した)、ということは、あらゆる被造物に対す

なければ存在しないものなのである。逆に考えれば、「否定」こそがそのものを「肯定」し神へとつなぎとめる綱であるとも言えるのではないだろうか。現に、ある対象を「肯定するのみ」で止まる世界は、この対象そのものが「神」となり、その結果世界はその「肯定」された対象によって打ち止められてしまうのである。

このようにして、対象を「肯定」しながらも「否定」することで高みを目指す、という新しい物質の見かた⁸を提供するのが、シュジェの言う「アナゴーゲーの流儀」なのである⁹。

4. 考察—「進化」への意義

それでは話を「進化」へと戻したい。先述したように、シャルダンの作りだす世界は「進化」を、動物的な変化にとどめず、精神の発展をも範疇へと入れた。こうした「精神の進化」を端的に考えるならば、それは現代社会において、非常に速い速度で発達していく知識の世界と、それに伴って発展した技術と、そのもたらす豊かな生活が浮かぼう。シャルダンの言うように、生命の本質が「見る」ことならば、「見る」世界を遥かに押し広げ知識の歩みは、人類全体の本質に適うものである。現代において我々は、身近におけるあらゆる出来事の原理を知識として持ち、その実りを技術として甘受している。ここにおいてまさに、人間存在の本質は精神にあると断言できるかのごとくである。

しかしこの知識の進歩を、我々は正しく利用できているだろうか。前述したように、知識は新たな現実の発掘であって、それ自体に人間の判断は存在しない。この知識に私たちが触れ、それを利用するときに初めて、それは人間の判断の対象になるのである。そこにおいて、知識の利用を誤ったのではないか、という事態がしばしば存在する。例えば原子爆弾の開発であり、環境破壊であり、また人を用材として使うかのような利潤至上主義である。そこにおいて使われる知識は決して悪ではない。しかしそれを使用する人間が誤ったがゆえに、さまざまな問題が発生しているのである。このような知識の使用は、人間が自分自身の利益にとらわれた結果、あたかも自身を否定して滅びへと向かうかようであり、それはシャルダンの言う、人格的にすべてのものが統合されるというオメガ点への収束では決してないし、シャルダンによってもたらされた精神進化の世界とはかけ離れてい

る肯定の行為であるという主張が読み取れる。

⁸実際に改築されたサン＝ドニの大聖堂(と、それを規範として作られていったゴシック建築)をみると、つけ柱のような装飾技術によって、ことさらに縦の線が強調されるのがわかる。そして空間の上のラインの最果ては交差リブ・ヴォールトによって装飾され、さらに上の広がり暗示する。こうした広がりにおいて、単に文章中の美術作品の解釈としてアナゴーゲーが登場するのではなく、シュジェが建築空間をもってアナゴーゲーを体感させようとしたもろみも読み取れる。そこでは縦のラインは上へと伸びゆくことで非物質、つまり手の届かない世界への上昇を我々に見せ、そしてその大きな窓から降り注ぐ光は、スタンドグラスの凶像による装飾を通して、我々のもとに受肉を想起させるのである。またシュジェが物質を受肉によって肯定し、そして建築においてアナゴーゲーの流儀を説いたならば、この建築そのものがキリストの受肉に与っているといえるのである。

⁹ アナゴーゲーの流儀における精神の飛躍のかなたに真の光＝キリストを据える、という点に、精神進化の最終目標にオメガ点＝キリストを据えたシャルダンの進化論と類似点を見出すこともできる。

るのである。

そこで、このような現状に活路を与えられるのが、シュジェの建築においてあらわした構想と、擬ディオニュシウスの否定の「知恵」なのではないだろうか。我々はあるものを神の名として考えるとき、それ自体を絶対的なものすることで自分自身はその観念の中にとらわれてしまうことになる。この名となる「あるもの」はあくまで我々が考え出しただけのものであって、その名にを絶対的なものとして考えるということは、自分自身に閉じこもることと同義である¹⁰。この自己閉塞性が招くのは、他者の不在である。自分自身の名の世界に閉じこもるとき、おのずからそこには利己主義的な自己しか存在しないことになる。この狭窄した世界観が、人のあり方を「人類」という大きなスケールで見ることを失わせるのである。しかし否定をもってその閉塞を破るとき、そこには自分の観念に規定されない「なにものでもない」他に開かれたの世界が見えてくるのである。この広い世界の視野を持たなければ、いくら知識と技術の進歩を得ようと、本当の進化はありえない。こうした知識と「否定の知恵」が協働したあり方としてあげられるのが、シュジェのゴシック改築であろう。もし彼の改築作業にアナゴーゲーの上昇がなければ、そこで造られた建築はそれ以上の意味をもたないものとなっただろう。しかし彼がアナゴーゲーの流儀を唱え、観賞者を高みの世界へと招く詩を建築に刻んだとき、そこにはありありと宗教的「知恵」と技術が協働する姿が示されたのである。そしてそこにもたらされたのは、ゴシック建築という建築様式の「進化」であったのだ。

これを踏まえて、我々もまたアナゴーゲーを迎えなければならない。否定によって上へと運ばれゆくことは、シャルダンの照らした真の進化の道行なのである。

おわりに

以上のように、人間の「進化」の歩みをシャルダンとともに見るとき、そこには必然的に精神の進化が問われてくるのである。この精神は、ひとつには学知の世界の発展としてもとれよう。しかし一方で、それを使う人間に対しては、人格的統合を目指す愛の意思が要求されるのである。この愛を実現するものこそが、アナゴーゲーの流儀であらわされる否定をもとにした自己超越の世界であり、シュジェの改築作業はその歴史的結実を一時代において、しかも普遍性をもって示しているのである。

〈参考文献〉

- E. Panofsky "Abbot Suger on the Abbey Church of St. Denis and Its Art Treasures" (Princeton Univ Pr; 1979)
 『キリスト教神秘主義著作集 1 ギリシア教父の神秘主義』谷隆一郎他訳、教文館、1992年
 テイヤール・ド・シャルダン『現象としての人間』美田稔訳、みすず書房、1985年
 入江重吉『ダーウィニズムの人間論』昭和堂、2000年

¹⁰擬ディオニュシウスがその著書『神秘神学』において、「神」や「超越」といった言葉すらも否定したことも、この点を実によく表している。「神」として我々の中に限定される神は、ただの卑小な観念にすぎないのである。